



題字は、明治 39 年 10 月 1 日陸軍大臣寺田正毅から外務大臣林薫宛に提出した文書（外交史料館所蔵）より抜粋。
紋様は、尾形光琳：『八橋時絵硯箱』東京国立博物館所蔵より。

東京東京湾学序説

文化財保護から生まれた地域学

東京湾海堡ファンクラブ会長 高橋 在久

平成 14 年 9 月 1 日に、東京湾海堡ファンクラブが設立された。しかも私は会長に推されたので、自己紹介ということで、私の基盤であり論拠の東京湾学の紹介をさせていただく。はじめに

文化財保護法が制定され、国民的な行政が始動して間もない昭和 27 年から、私は一員として千葉県文化財の保護と活用に従事し始めた。こうした約 30 年間の過程で東京湾東岸で生まれた因縁から、東京湾をはじめは自分史の、続いて地域史の対象として意識し、東京湾学を構想してきた。その後、國學院大学や江戸川短大の教壇に立ち、私の東京湾へのこだわりは一層増大し、東京湾学会まで設立した。

私はこうした道程で歴史とは背に回った未来だとも自覚し、東京湾と沿岸地域の埋め立て工業化の中で、歴史と文化財の発掘と保護・普及につとめた。公私両面で体験を続けたが、特に文化財保護委員会（現・文化庁）の助成を得た『東京湾漁撈習俗調査』を千葉県教育委員会の、昭和 40 年度から 2 カ年事業として企画し参加したが、私の東京湾観を一挙に飛躍させてくれた思い出がある。

とにかく私の東京湾学は文化財保護行政の展開過程で芽生えたが、ここでは一つの結果である東京湾学会の、東京湾学セミナーで「東京湾学提要」として提示した事項を整理したいと思う。思えば 50 年にもなるが、私をこうした環境に導入下さったのは、元文部事務次官の井内慶次郎氏だが、ありがたいことに今も東京湾学会顧問としてご指導いただいている。宿縁にも似た人生を感じながらまず記して謝意を表したい。

東京湾学の発想と経過

画期的といいたい平成 7 年 12 月 2 日、東京都千代田区神田駿河台の明治大学百周年記念大学会館で、東京湾学会設立総会が開かれ海を基盤にした新知的集団が誕生した。いうまでもなく東京湾と沿岸地域の水土と文化は、横須賀市の夏島貝塚が証明しているように約 1 万年間の年輪を秘めている。しかも東京湾は沿岸地域と共に首都圏の核になり、多彩な自然と人生の形成と、変容の省察展望が可能な花綵列島日本の典型的な地域でもある。

さきに高橋在久編『東京湾の歴史』（平成 5 年・築地書館）で、私は「東京湾の効用と発見史」を分担し人生との因縁を総括し、その後、高橋在久著『東京湾学への窓』（平成 8 年・蒼洋社）で、実験してきた学際的な地域学としての東京湾学の構想を提示した。こうした東京湾学へのこだわりは昭和 30 年代からで、東京湾東岸の富津岬洲元で生まれた私の自分史が端緒であった。地先の年輪だけでも多様なことに注目していた時に、学生時代から高嶺の花であった民俗学の創始者、柳田國男先生に出会った。

柳田先生の晩年で後に岩波文庫の一冊になった『海上の道』（昭和 53 年・岩波書店）の、ほとんどの論文を執筆し終わった頃で、私は柳田先生のお宅を度々訪問した。こうした学問的な環境であったので、当然のように話題は海の事になり、私の足下の東京湾も民俗学の対象にあげられ、多くの示唆を受けた。こうして自分史から確実に地域史を意識し脱皮が始まった。

当時の私は千葉県の文化財保護行政に参画していたが、高度経済成長の路線上で、東京湾と沿岸地域の埋め立て工業化という「滄桑の変」にも直面していた。こうして私の研究的な意識は、激動的な環境に一層触発されて、公私両面で東京

湾と沿岸地域の、年輪の再発見と大衆化を展開した。歩く・見る・聞くためのフィールドワークを基本にしながら、結果は新聞・ラジオ・テレビ・雑誌さらに博物館がメディアになり支えてくれた。

ささやかながらこの間に私が参画した忘れがたい事業は次のとおりである。

『東京湾ものがたり』昭和 36 年・朝日新聞千葉版で 10 回ほど連載執筆担当。

『東京湾漁撈習俗調査』昭和 40 年・41 年・千葉県教育委員会・企画調査担当。

『東京湾展』昭和 46 年・千葉県立上総博物館・企画総括担当。

『東京湾今昔』など昭和 40 年から NHK テレビ・ラジオ番組の企画・取材・出演。

こうした 4 種の東京湾体験はそれぞれ形態を変えて継続し現在に至っているが、幸いにも社会的・学術的に東京湾への関心を盛り上げ再考を促す機会になった。高橋在久著『東京湾水土記』(昭和 57 年・未来社)と『江戸前 年輪と光景』(平成 6 年・第一法規)はこの道程ではぐくまれた小著で、同時期に『地理』東京湾特集号(昭和 47 年 7 月号・古今書院)や菊地利夫著『東京湾史』(昭和 49 年・大日本図書)なども刊行された。

さらに近年においては東京湾文庫の開設ができる程に論著が増加しているが、なかでも峰岸純夫「中世東国の水運について」(『国史学』141 号・国史学会)などの論文と、西川武臣著『江戸内湾の湊と流通』(平成 5 年・岩田書院)などの論集がある。しかも地域学形成への潮流も増大し上田正昭著『歴史家の眼』(平成 7 年・小学館)によると、ローカルでグローバルな視点からのグローバルな地域学が各地で誕生している。

東京湾学を発想し知的な遍歴と放浪にも似た道中でこうした動向を知った私は、いよいよ東京湾学構築の可能性を実感し「東京湾学の形成構想」(『交通史研究』35 号・平成 7 年・交通史研究会)なども提示してきた。とにかく東京湾と沿岸地域の水土と文化にこだわり始めて 40 年になるが、牛歩遅々の状況から脱出できないままである。しかし同志の人の輪もでき始め東京湾学の輪郭も鮮明になり、東京湾という海を核にし沿岸地域を含めた水土と文化に焦点を定めた。

東京湾学の目的と対象

東京湾文化史から東京湾学を発想した私は、昭和 56 年に東京湾クラブを結成し東京湾学の実験をしてきた。さきにあげた『東京湾の歴史』の冒頭で触れてもきたが、さまざまな立

場から東京湾に注目していた有志が参加した。毎月 1 回の学際的な談話会で人の輪を形成し毎回 2 人から問題を提示してもらい、東京湾と沿岸地域の水土と文化の再発見と交流を続けた。東京湾クラブは 100 人ほどの小集団だったが、運営原理の必要を感じた私は、昭和 57 年 6 月の談話会で「東京湾学を形成するために」という提示をした。東京湾学の性格・課題・方法などが骨子であったが、後に高橋在久編『セルポーン』(創刊号・昭和 59 年・日本水土文化研究所)に収録し公開した。この実験は 10 年間ほど継続したが東京湾学の構想を固めることができ、自著はもちろん学会誌や新聞・雑誌などで提唱してきた。

さて主題は「東京湾学の目的と対象」であり地域学として、当然ながら目的や対象を明確にしておく必要がある。まず東京湾学の目的は実験と思索を総括した結果として、

東京湾学とは、東京湾と沿岸地域の、自然の水土と、水界民の文化を、学際的に根源と推移を、考察し展望する地域学。

という定義のなかで鮮明にした。いうまでもなく、この国の地域学として海でくくった例はなく、私は東京湾学の目的設定には苦心した。

なおこの定義にあげた「水土」と「水界民」という用語であるが、ここにも東京湾学を発想してからの思索の背景がある。私がはじめて「水土」という言葉に出合ったのは、

ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。それは古くは水土ともいわれている。(後略)

という和辻哲郎著『風土』(昭和 54 年・岩波書店)の第一章の冒頭においてである。

こうしてさらに室田武著『水土の経済学』(昭和 57 年・紀伊国屋書店)によって、「水土」の語史の豊富なことを教えられ、風に吹かれてきた実感と合致したので採用した。念のため『広辞苑』(岩波書店)や『大辞林』(三省堂)を開いたが、いずれも「水土」の概念は「風土」と大差のないことも判明した。私はこんな理解から小著『東京湾水土記』を刊行したこともあるが、これからも東京湾学の基本語として活用したいと期している。

地域学としての東京湾学の用語の象徴性と実感性の大事なことは、「水土」と同じように「水界民」についてもいえる。これまた普及中の言葉で注釈が必要かも知れないが東京湾学で採用した「水界民」とは東京湾を基盤にした生活者である。この言葉にもフィールドワークに裏打ちされた歴史があり、私は川喜田二郎著『素朴と文明』(平成元年・講談社)から水

- 海・川・湖 - の世界の活動者だと教えられた。

いうまでもなく東京湾学の視界を拡大してくれるキーワードで、さきにあげた『東京湾の歴史』などで実験し効用を自覚してきた。とにかく東京湾学というと単純に漁業者だけを連想しがちだが、造船業者から交通業者さらに運輸業者などをはじめ、水産加工業者・販売業者など直接・間接の関係者は多彩である。私はこうした「水界民」という言葉に共鳴しながら、東京湾学の実践には不可欠の概念だと確信している。

次に東京湾学の対象の地理的範囲を私は、東京湾と沿岸地域だと極めて常識的に規定してきた。しかしこれまでの実験からいうとこの理解は広狭さまざまで、曖昧さが目立ったので一応統一的な意識の徹底に努めている。特に東京湾の広狭については地理学の区分に従い、東京湾の江戸前と呼ばれた内湾と浦賀水道ともいう外湾は当然の対象にし、さらに考古学が解明してきた奥東京湾までを含む総体の範囲を考えている。

東京湾学の対象の地理的範囲はほぼ鮮明に提示できたと思っているが、あくまでも一応で私は「沿岸地域」が内包している要素の理解も重要だと思っている。沼田眞著『都市の生態学』（昭和62年・岩波書店）から、私は東京湾学を構想しながら学ぶことが多かった。そのひとつの「沿岸陸域と沿岸水域」整理論から「沿岸地域」の範囲を考えながら、結果として全東京湾に流入してきた河川の流域までを対象の地理的範囲に定めた。

東京湾学の方法と実際

東京湾と沿岸地域の年輪は多彩で、日本の地域の水土と文化の形成と変容を象徴している典型である。こうした認識は自分史の基盤としての東京湾へのこだわりから芽生え、民俗学を軸にした東京湾文化史を構想し始めた昭和30年代に生まれた。現在も東京湾と沿岸地域を日本の地域の典型と見ているが、この道程で文化史の在り方を基本課題にもして模索し「地方学(シカガキ)の新方法」に出合い学んだ。

覚醒することができた「地方学の新方法」は柳田國男先生の昭和2年の講演録で、『定本柳田國男集・第25巻』（昭和39年・筑摩書房）に収録されている。このなかで特に個別的な専門学の成長は認めながらも、

各部面の有用なる智識を繋ぎ合わせ、または配合する程度とか順序とか折り合いとかいうことになると、どこを探してもその専門家という者がいない。
と憂慮されていた。

この講演は昭和2年（1927）という半世紀以上はるかな過去においてであるが、せっかく百科の学は精透の域に達しても、全体の組織総合の学問というものが欠けている。という指摘にも直面し、私は東京湾文化史はこの欠点の補充からだとして受けとめた。こうして孤立的なそれぞれの専門学の成果の総合に努め、学際的な地域学への脱皮を目標にし東京湾学の構築を期してきた。

この「地方学の新方法」は東京湾学の方法論の原典ともいえる論説で、現在いわれている学際的で総合的な方法論の先駆である。私の東京湾文化史から東京湾学構想への根幹になり、水土と文化を「学際的に根源と推移を考察し展望する」方法の基礎になった。ささやかではあるがさきにあげた『東京湾学への窓』はこうした私の東京湾学実験の一端であり、学際的な方法の可能性はもちろん文化的な生産と社会的な認知まで期待している。

この方法としての学際性は東京湾学に限定されたことではないが、構造的で総合的な水土と文化の究明には、多くの専門学の知識の活用が基本になる。当面は専門学を中心にした学際的な援用と究明だけだが、究極においては組織的で大規模な同一課題の学際的な共同研究が必要である。梅棹忠夫著『研究経営論』（平成元年・岩波書店）の「学際的研究のすすめ」は、実績の上でこうした共同研究の効用を喝破されている。

東京湾学の学際的な方法を定着させる上でこの梅棹説の存在も大きく、私は「東京湾と沿岸の地名研究」で実験を重ねながら可能性を確信してきた。周知のとおり東京湾と沿岸地域には、土地の個性から命名された多くの地名があり、文字化以前から継承されていて由来などは民俗学の基本問題である。海底だけでも航海の安全や漁撈の資源確保のため、体験的に発見し呼称してきた危険な浅瀬や魚貝の生息地が多い。

沿岸地域の地名となると新旧さまざまな土地の個性を基礎にした命名があるが、いずれの地名も命名由来の自然や歴史の解明は十分とはいえない。「東京湾と沿岸の地名研究」は試験的に進行中であるが、この解明ではまず民俗学による地名伝承の確認と由来を学際的に追求している。こうして東京湾と沿岸地域の原風景の手がかりになる地名を、学際性を基本に理解しているが共同研究の効用も実感している。

私は大規模な共同研究の実現も確信しているが、この思いは、『研究経営論』の「研究に対する基本的な気がまえについて」の、「共同研究というのは（中略）専門を同じくする人は別に集まらなくてもいいのです。専門の違う人が（中略）専門を越えて共通の関心を持っている人たちが、共同で研究す

「これが共同研究です。」という方式から固まった。こうして東京湾学構築の次の方法を生み具体化が始まった。

平成5年秋さきにあげた『東京湾の歴史』の刊行直後に、分担者から発展的な共同研究の母胎づくりの提案があった。私にも同じ立場での体制整備のひそかな希望があったので、知的集団としての東京湾学会の設立を本格的に画策し始動した。まず国際的な生態学者で『東京湾の歴史』監修者の沼田眞博士に、このことを伝え基本的な共鳴と体験的な在り方のご指導や激励をいただいた。こうして東京湾学会準備委員会を学際的に結成した。

東京湾学の課題と学会

東京湾学会は東京湾学研究を促進し普及する装置として、学際性の上に大衆性を組織の基本にして誕生した。時代の動向とも合致し構成員は学際的で大衆的であり、大学・研究所・博物館・自治体・報道機関・教育諸機関に所属する研究者と東京湾愛好者の参加を得た。しかも体制強化策として採用した法人会員制も軌道に乗り、すでに定例の事業「東京湾学セミナー」開催と、『東京湾学会誌』の刊行などで活動を始めている。

東京湾学を発想してから十数年が経過し幸いにも東京湾学会にまで育ったが、東京湾学の構想と普及は十分ではなく社会的認知も完全ではない。従って課題解決のための研究実績を提示し証明する必要があるので、東京湾学の可能性を秘めている研究課題を整理することにした。首都圏と大体重なる東京湾学の対象地域の水土と文化の、構造・機能や根源・系譜さらに推移・未来の学際的な追求が可能だからである。

これまで私がある程度まで実験してきたことや、専門学による研究成果などを整理し分類した結果は次のとおりである。

地形・植生・気象・景相などからの環境史と遺産。

遺跡・遺物・民俗などからの生活史と遺産。

干潟・塩田・新田・埋立などからの変遷史と遺産。

船舶・港津・河岸などからの交流史と遺産。

社会・生活などからの都市史・心性史と遺産。

となるが、文化史にこだわってきた私の東京湾学の学際的な課題でもある。

こうした東京湾学を構築し目的を達成することによって、東京湾と沿岸地域の原風景と新風景の考察と展望が可能になる。ここであげた原風景とは過去において形成された水土と文化の年輪を指し、新風景とは未来に連なる水土と文化の変容を意味している。一地域学ではあるがそれぞれ専門学として知識の編成に貢献してきた力を、学際的な東京湾学で連結

し海から見直した文化史の確立まで努力を続けて行きたい。

とにかく東京湾学の現在は学問としての実績による社会的認知を得ることと、東京湾学の交流の基盤を強化すること以外にはないと思う。すなわち東京湾学の理念や方法を根幹にした装置の東京湾学会を、専門学を結集させた強大な知的集団に発展させることである。すでに組織の基本として研究者だけではなく、有志の社会人と法人の参加も順次増大し専門仲間だけの従来学会型態からの脱皮が始まっている。

こうした東京湾学の社会的な装置の東京湾学会の現状であるが、幸いにも地域学の集団としては極めて異色の役員・会員で構成されている。まず、顧問井内慶次郎（元文部事務次官）会長沼田武（前千葉県知事）、副会長佐藤毅（江戸川短期大学教授）同中村俊彦（千葉県立中央博物館生態学部長）、同畠山哲明（元週刊朝日編集長）、理事長高橋在久（江戸川短期大学名誉教授）事務局長筑紫敏夫（千葉県立中央博物館科長）という陣容をあげることができる。

さらに理事も学際的・大衆的で出身を異にした理事会を形成し、連帯しながらも緊張し学会活性化への路線を歩み始めている。主な顔ぶれは小池新（共同通信社）庄司達哉（東京成徳大学）鈴木仲秋（江戸川短期大学）斗鬼正一（江戸川大学）西川武臣（横浜開港資料館）仁科又亮（東京工芸大学）平野馨（千葉経済大学）宮田昌彦（千葉県立中央博物館）の諸氏などで、それぞれ専門領域から東京湾に注目している。

おわりに

これまでささやかな実験と思索を基礎にした東京湾学の、構想から学会に関連した基礎の概要を述べてきた。小さいながらも東京湾学は地域学であり、目的や方法の明確な理解と普及を念願しているからである。もちろんこの構想を完成させ社会的な認知を得るためにはさらに実験を続けるだけだと思っている。

さきに私は東京湾学を定義して、

東京湾学とは、東京湾と沿岸地域の、自然の水土と水界民の文化を、学際的に根源と推移を、考察し展望する地域学。

としたが、これまでの東京湾クラブや東京湾学会での学際的な体験の効果は大きい。私は歴史的な立場から東京湾学を実践してきたが、社会的な自然的な東京湾学のあることも知った。こうしてゆさぶられ触発されて視界を拡大し活性化まで経験している。

近年のことだが江戸学・東京学・横浜学さらに千葉学など

の、提唱と活動があり地域学としてそれぞれが個性的な飛躍を期している。こうしたひとつに江戸東京学があり小木新造著『江戸東京学事始め』(平成3年・筑摩書房)に、江戸東京学とは、「江戸から今日までの都市形成発展と、文化変容の過程を一貫した視座からとらえ、その連続性や非連続性と、江戸東京の都市としての特性を学際的に研究する学。」という規定があった。

こうした江戸東京学を東京湾学から見ると、対象地域が江戸・東京という都市で無縁ではない。いうまでもなく東京湾学も当然だが江戸・東京を対象地域にしているが、違いをいうならば全東京湾と沿岸地域の水土である。とにかく江戸東京学に関連した研究の実績は多大で基礎も確立されており、東京湾学は比較すれば幼稚で歩行もようやく始まったばかりである。しかし、海を母胎にした独自性を自力にし並行したいと願っている。おわりに、本稿は「千葉史学」30号の小文を改訂したものである。

東京湾海堡と咸臨丸航海長 小野友五郎

東京湾海堡ファンクラブ幹事 安室真弓

小野友五郎は文久2年(1862年)12月、『江都海防真論』七巻を木村軍艦奉行に献じた。これは万延元年(1860年)以来、2年余にわたって、江戸前を実測・調査して作りあげた国土防備計画であった(東京大学史料編纂所蔵)。藤井哲博著『咸臨丸航海長・小野友五郎の生涯』(中公新書)によると、それは、今日でいう「ジオポリティック」な戦略・戦術論のはしりであって、当時流行していた観念論的な海防論とはちがいが、客観的、総合的かつ具体的なものであった。その内容は、海岸防備を嚴重にして江戸の人心安定を図ること、江戸への米穀の輸送路を確保しておくこと、江戸市民のうち戦闘員をきめておき、有事の際はそれだけを江戸に残すこと、江戸市中に防火区画を設け、火除地を定めること、海上からの敵襲に際しては、水際で殲滅を原則とし、内陸深く敵を入れないよう防御することの五つを柱として、これを実現するための具体的な計画を示したものである。とくに冒頭の防御配備と終わりの防御戦術については、彼の持論である江戸前戸口部と、江戸前海域の二重防御、陸上・台場の砲台と機動力をもつ砲艦と、緊密な関係の具体的説明に多くの紙数をさいている。

この基礎には国際的な歴史があった。『江都海防真論』をま

とめた二年前の万延元年に、日米修好通商条約批准書交換の遣米使節と共に咸臨丸の航海長として、初渡米の時にサンフランシスコに滞在し、米観測艦「アクチブ」号でサンフランシスコ湾々口部を周航し、湾口南岸のポート・ポイント砲台(備砲275門)、北岸の砲台予定地のポニタ、および湾口中央部のアルカトラス島(250門)を、海上から視察し、西洋式湾口防備の実態を知った。万延元年5月6日帰国してから、サンフランシスコ湾口に比べ、江戸前戸口部の防備は、はなはだ貧弱だったので、なんとかしなければと考え、防備強化の必要性を自覚し、まず富津・観音崎・猿島付近、つまり江戸前戸口部の精測を開始した。

特に富津の長洲については、錐を打ち込んで岩盤の厚さを験知するため、一種のポーリング機械を特製して、海底の岩盤調査もおこなった。これは台場、今日の高層建設の可能性を検討するためであった。こうして、『江都海防論』の外に「富津暗礁図」「江戸湾実測図」なども生まれ、さらに元治元年(1864年)に『江都海防真論』を改訂した『江戸海防論』を加え、二重防御論を強調し、幕閣に献じたが、湾口防御構想は幕府と共に消え、実現したのは明治時代であった。しかし友五郎の東京湾海堡の計画者としての位置は認める必要がある。なお、富津市大堀の明澄寺に、明治時代に同地に居住した因縁で、墓地があり子孫もいる。

東京湾海堡ファンクラブ第1回見学会報告

日時：2002年11月9日(土)10:30~15:00

集合場所：国土交通省東京湾口航路工事事務所〔横須賀市平成町3-21-44 tel.0468-28-8366〕

見学会当日はあいにく波が高く、船舶が出航できなかった。第二海堡上陸・見学の予定を変更し、第三海堡の撤去工事で引き上げた兵舎や鉄筋コンクリートケーソンを見学した。

10:30 東京湾口航路工事事務所(集合)

11:00 追浜ヤード・引き上げ物見学

12:10 東京湾口航路工事事務所(第三海堡展示室見学)

14:00 衣笠公園・西田明則君之碑

JR衣笠駅(解散)

第三海堡撤去工事で引き上げた兵舎などを見学した。
(2002.11.9 撮影)





見学会参加者の記念撮影(2002.11.9 追浜ヤードにて)



東京湾口航路工事事務所内
第三海堡展示室



西田明則君之碑を見学(2002.11.9)

西田明則君之碑（解説）

「西田明則君之碑」は、東京湾海堡工事の功労者である西田明則の功績を讃えるため、松井庫之助陸軍中將らによって建立されたものです。

海堡とは、砲台設置のために海中に設けた人工島です。明治から大正にかけて、陸軍省は首都：東京の防衛のため、東京湾口に三つの海堡を建設しました。三つの海堡は、造られた順番に第一海堡、第二海堡、第三海堡といいます。

特に、ここ(衣笠公園)から北東約 8km 沖合にあった第三海堡は、明治 25 年(1892)から大正 10 年(1921)まで、約 30 年の歳月をかけて建設されました。第三海堡が建設された海域は、水深が約 40m と深く、潮流も激しく、その建設工事は、明治年間における軍事土木最大の難工事となりました。第三海堡は、巨額の費用と幾多の貴重な人命を犠牲にして造られましたが、竣工した 2 年後の大正 12 年(1923)9 月 1 日、関東大地震によって倒壊し、海中に沈み、砲台としては使用できなくなってしまいました。しかしながら、第三海堡の建設は、そ

の後の海洋港湾技術に多大な経験と教訓を与えました。

「西田明則君之碑」は、関東大地震の直前、大正 12 年(1923)3 月 31 日に完成し、大正 12 年 4 月 22 日に除幕式が行われました。碑の設置場所として、三つの海堡を見守る位置にある衣笠公園が選ばれたのです。

関東大地震後の第三海堡は、なかば暗礁と化し、海中にありましたが、航路安全のため、平成 12 年(2000)12 月から 7 年間をかけて撤去することになりました。

漢文で書かれた碑文の意味は、以下のようなものです。

西田明則君之碑（現代語訳）

東京湾に三つの海堡を山のようにそびえ立たせ、帝都の入り口の砦とし、海上を護るため、明治 12 年(1889)、海岸防禦取調委員が参謀本部内に置かれた。間もなく、陸軍工兵少佐：西田君は常任委員に任命され、これにもっぱら従事することとなった。東京湾海堡の設計・施工の多くは君の考えによるものであり、大変な苦勞をして行ったものである。それは、中国の禹*の治水に勝るとも劣らないものであった。(*禹は古代中国伝説上の王で、治水に功があった。) ことに、第三海堡の位置は水深が 20 尋(比)余り(約 40m)もあり、潮流はこれまでに例のない早さであった。人々は大いにこれを危ぶんだ。しかしながら、君はあらゆる方面に説いて廻り、その結果、ついに今日、完成するに至ったのである。これは、あらかじめ成功する成算がなければ成し遂げられなかったものである。君の功績は偉大と言うべきである。君は名を明則といい、山口県出身で、見識と度量があり、数学に精通していた。明治 19 年(1886)に陸軍技師となり、一生、その職にあったが、その道のりは決して安らかなものではなかった。明治 39 年(1906)5 月 21 日、君は 80 歳にして竣工を見ることなく逝去され、横須賀聖徳寺の墓地に葬られた。今、この 3 月*、志を同じくするものがあい計らい、衣笠公園に碑を建て、後世に伝えることとした。(*大正 11 年(1922)3 月、「東京湾防備二関スル陸軍少佐西田明則君ノ紀年建碑趣意書」が配布され、建碑活動が始められた。) このたび、各皇族より御下賜金を戴いた。大いに名誉なことである。私は君と交誼があったので、この碑文を作成した。君の遺言により、君の骨は三つの海堡を一目で見える所に埋めた。君の靈魂が長く三つの海堡を護られることを希望する。あゝ、君は死してのちもなお、心を尽くし、国のためにつとめるのか。

大正 11 年(1922)8 月

元帥陸軍大将 子爵 上原 勇作撰

〔現代語訳：島崎武雄〕

第1回海堡シンポジウム開催報告

第1回シンポジウムは43名という大勢の方に参加いただき、盛会となりました。



シンポジウム風景

〔日時〕平成15年1月18日(土)13:30～

〔会場〕区立東上野区民館 101集会室

台東区東上野3-24-6 TEL.03-5807-1520

〔講師・内容〕

朝倉光夫「海堡建設の技術史」

西田好孝「西田明則の子孫として」

高橋悦子「海堡から生まれた文芸」

〔司会〕高橋在久(東京湾海堡ファンクラブ会長・東京湾学会理事長)

〔主催〕東京湾海堡ファンクラブ・東京湾学会



右から高橋会長、西田副会長、朝倉理事

海堡建設の技術史

～ 建設から撤去まで ～

東京湾海堡ファンクラブ幹事 朝倉光夫



朝倉幹事(2003.1.18)

はじめに

第三海堡の調査・撤去について、今現在、東京湾口航路工事事務所(国土交通省)において調査中ではあるが、今までに分かってきたことについて報告する。資料等については、東京湾口航路工事事務所のからご提供を頂いた。

経緯

東京湾に海堡を造る経緯はどうであったのかを簡単に、年号を追って見ると、次のようなできごとがあげられる。

(1) 嘉永6年(1853)6月3日

ここでは、江戸湾の防衛のきっかけであり、やはり一番インパクトのある出来事と言えば、嘉永6年(1853)6月3日の「ペリー提督の率いる黒船艦隊」が浦賀へ来航したことがある。この事件から、国土防衛の機運がさらに高まったことは確かである。今年はちょうど150年という節目の年に当たる。ご当地、横須賀市では「開国際」を計画してさまざまな催し物を予定していると聞いている。

ペリー来航から1ヶ月後の嘉永6年(1853)7月25日に、勘定奉行;川路聖謨(トアヲ)(1801~68)と葦山代官;江川太郎左衛門(1805~55)が観音崎~富津間の海中台場建設について幕府に答申したとされる(『大日本維新史』)。しかし、観音崎~富津間の海中台場は長い年月を要するので、むしろ、東京湾内海の防御施設整備を急にすべきことを説いている。すでに、幕末において東京湾口の海堡建設構想が議論されていたということである。

品川台場は突貫工事の末、安政1年(1854年、黒船が来てから1年後)に5個の台場が完成した。それが東京湾に造られた最初の海中台場である。

(2) 明治維新

明治時代に入って、明治新政府は帝都「東京」を護るため、東京湾海防計画に取り組むことになった。

ここから、東京湾海防計画案や意見書が提案されることになる。

(3) 明治4年(1871) 山県有朋:「軍備意見書」

明治から大正にかけて陸軍元帥として君臨した山県有朋は、明治4年(1871)、「軍備意見書」を提出し、日本列島の要塞化を主張した。

その中には、次のことが提案されている。

軍備の目的は、国内向けから対外国向けに変えて行かなければならない。

20歳以上の男子を対象に徴兵制を敷くべきである。沿岸の防御のため、戦艦の建造と海岸砲台の建設が必

要である。

兵学寮・造兵司・武庫司(兵学校・兵器製造所・武器庫)の設置が重要である。

ロシアの脅威に対抗するため、軍備を整備することが必要である。(陸軍は想定敵国をロシアと見ている。)

沿岸の防御については、「戦艦を造る。海岸砲台を築く。」と述べている。山県は日本列島の要所に海岸砲台を築き、その間は動く砲台である戦艦で防衛しようとしたのである。その後、徴兵制度を初めとする本文書の諸提案がほとんど実現し、大日本帝国陸軍の骨格を形作っていた。

(4) 明治5年(1872)マルクリー:「我国海岸防禦法案」

明治新政府は、陸軍の体制整備に当たってはフランス式を採用することとした。そこで、明治5年(1872)4月11日にフランスから軍事顧問団(16名)が来日した。その団長(陸軍教師長)がマルクリーであった。東京湾を視察した結果マルクリーは、次のような提案をした。

東京湾口、即ち、観音崎・富津岬・猿島に砲台を設け、さらに、富津州に海堡を設けるべきである。

東京の防御としては、品川台場は市街地に近すぎ不十分であり、神奈川県側の浜川崎・多摩川河口から江戸川河口まで水雷線を設けるべきである。

横浜の防衛では、砲台設置に適した地点がないので、海中に水雷線を設置し、その終点の鶴見川河口に砲台を設けるべきである。

このように、すでに後の第一海堡の構築構想が提案されている。

(5) 明治6年(1873)12月、鳥尾小弥太:「東京湾海防策」

陸軍省第6局長であった鳥尾小弥太は「東京湾海防策」を建議している。これは、東京湾を囲繞する沿岸の砲台建設を提言したものである。

明治7年(1874)12月、陸軍少佐の牧野毅・黒田久孝は、「東京湾防禦案」を建議した。内容は、各所における砲台建設だけでなく、設置すべき大砲の門数を具体的に提案している。

明治8年(1875)~9年(1876)にかけて、山県有朋はフランス軍事顧問団の陸軍中佐ミニユエーに命じ、日本南部海岸の防御方策を作成させた。その中の第3編に、東京湾の防御に関する具体的な兵舎・武器庫の設置について提案をまとめた。

(6) 明治9年(1876)1月4日

山県有朋は、「砲台建築の着手順序及び経費予算書」を明治天皇に提出し、ここでは海岸防御のための砲台建設は東京湾

から着手することになっていた。

落成時期 10年 4,267,733円

・明治9年(1876)12月、陸軍省は観音崎地区における砲台建設地の一部を買収した。これが明治以降における国防工事の始まりであった。

・続いて、明治11年(1878)9月、陸軍省は富津岬の測量を開始した。

・明治13年(1880)6月、陸軍省は観音崎の第一砲台の建設に着手した。明治時代の最初の砲台工事であった。

(6) 明治14年(1925)、西田明則:「東京湾口砲台建築費御下附二付上申」

明治14年(1925)10月26日、海岸防御取調委員:西田明則は「東京湾口砲台建築費御下附二付上申」を参謀本部長山県有朋に提出した。この文書で初めて公文書に西田が登場している。

また、ここに後の第一海堡となる「富津海堡」の呼び名が初めて出現している。そのときの建設費は、1,687千円となっている。

以上のような経緯を重ね、第一海堡の着工にいたった。

第一海堡(水深1.2~4.0m、潮流1.0m)は明治14年(1925)8月に着工した。水深が浅かったため、基礎として大型の野面石を高さ満潮面上1.7mまで積み、内面には砂を充填した。土運船には押送船と伝馬船を使用した。第一海堡は9年後の明治23年(1890)12月に竣工した。

(7) 明治22年(1889)、黒田久孝:「増設海堡候補地ノ海面調査復命書」

明治22年(1889)6月24日、黒田久孝は参謀本部の指示に従って、現地調査をし、海堡の増設候補地として、富津浮標近傍 走水沖2,000mの2地点をあげている。ここに第三海堡の位置が初めて具体的にされることとなった。

明治22年7月19日、参謀総長であった熾仁(ヲヒト)親王は「近年の艦船構造が進歩し、現在の海堡だけでは敵艦の航行を阻止できないので、湾口に2個の海堡を増設せざるを得ない。」とし、第二海堡、第三海堡を示している。

その結果、明治22年(1889)8月に第二海堡の建設が着工された。〔竣工は大正3年(1914)6月。〕

そして、第二海堡着工の3年後の明治25年(1892)8月、第三海堡の建設が着工された。〔竣工は大正10年(1921)6月。〕

第二・第三海堡の施工

(1) 第二海堡(水深8.0~10.0m、潮流1.2m)

明治22年(1889)7月、防波壁試築工事が始まった。海中へ

捨て石投入開始後、9月には捨て石の頭部は干潮面に露出し、10月には建物の建築に着手している。

その工事手順は、比較的水深があるので、海底に基礎割栗石を投入、それが海面上に現れるまで積み上げ堤体を形成し、沈下をまって堤体が安定してから、さらに大型割栗石を満潮面上 2.0mまで積んで人工島を形成していった。

作業船としては五大力船やだるま船を使った。

(2) 第三海堡(水深 39m、潮流 1.5m)

第一、第二海堡の経験を生かしながら、第三海堡の工事に着手したが、今の技術を持ってしても、大水深のため、非常に困難な工事である。

工事は第二海堡と同じように割栗石の投入から始まった。水深が 39m と深いため、中詰め砂の厚さも相当厚くなる。

そのため、全体の安定を図るため、載荷砂によって全体の充填した砂の沈下を促進させる圧力を与え、その状況を調査(4カ年)した。最初は1ヶ月で平均 32~75cm、年間で 90cm も沈下する箇所もあった。明治 42 年(1909)の後半には落ち着いて来た。そこで、基礎上部建築物の基礎の搦固め作業を「要領書」を作って施工することとし、明治 43 年(1910)2月に着手している。(竣工見込みは 44 年 8 月。)

しかし、第三海堡は 4 たび、風浪によって大きく被害を被った。その一つ、明治 44 年(1911)7 月 26 日、東京湾に高潮が来襲し、基礎の一部に大きな被害が発生した。その調査によると、防波壁前面の防波塊が散乱し、防波壁が倒壊していた。そして、破壊部の復旧には今後 1 年かかる。上部建築の設計も見直しが必要とし、その修正案が提出されたのが明治 45 年(1912)2 月だった。防波壁の設計変更だけであるが、提出されている調査報告書によると、設計変更しても既達の前算内で出来るとしている。いつの時代も予算審査が厳しかったのであろうか？

(3) 鉄筋コンクリートケーソン

第三海堡では、波浪から護る鉄筋コンクリートケーソン工事(ケーソン:防波堤の本体となるコンクリートの箱)を行っている。鉄筋コンクリートケーソン工事は、大正 2 年(1913)から大正 3 年(1914)にかけて施工されたと推測されている。しかし、残念ながら鉄筋コンクリートケーソンに関する資料や記述したものは、まだ発見されていない。

鉄筋コンクリートケーソン工事に係わったと思われる人物が、伴宜(伴宜)陸軍技師であった可能性が高い。「現代人名辞典」(大正 1 年)によると、第三海堡の設計を担当していた伴宜陸軍技師は、明治 44 年(1911)ほぼ 1 年間、1 月から 12 月まで、陸軍工事視察のために、欧州各国に派遣されてい

る。

ロッテルダム港では明治 38 年(1905)3 月 20 日には、最初の鉄筋コンクリートケーソンの製作が開始されているので「伴」はこれを見学した可能性が高い。

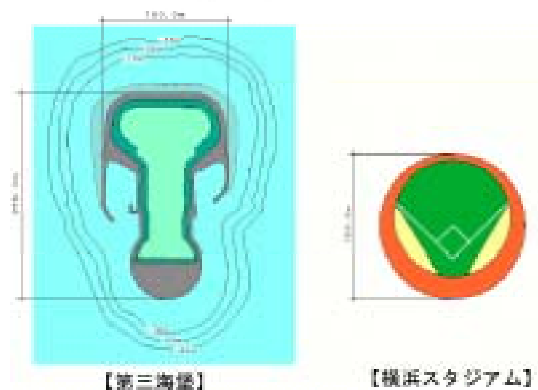
一方で、明治 44 年(1911)7 月の第三海堡が被災を受けていて、陸軍築城部は防浪堤に係わる設計研究を重ねていて、明治 45 年(1912)2 月と大正 2 年(1913)3 月の 2 回にわたって設計書を提出している。

また、神戸港では、明治 43 年(1910)8 月に、最初のケーソンを据え付けている。

このような経緯から、伴はロッテルダム港の製作・据え付け工事を学び、帰国後、被災を受けた第三海堡のケーソンの設計を行い、提案したものと推定される。その最初の鉄筋コンクリートケーソン設計書である図面・設計要領は失われている。

第三海堡では、13 函のケーソンが据え付けられたが、全て傾いてしまった。その中でも、一函だけブロックに引っかかって比較的、引き上げが容易なケーソンを引き上げ、現在、横須賀の追浜のヤードに仮置きされていて、見学が出来るようになっている。

このような経緯によって、第三海堡は大正 10 年(1921)6 月 6 日に竣工した。



第三海堡の大きさ

崩壊

次に、苦難の末、ようやく完成した第三海堡はどのように崩壊していったかを見ていきたい。

(1) 関東大震災

第三海堡が完成してから 2 年後の大正 12 年(1923)9 月 1 日午前 11 時 58 分 44 秒、関東大地震が発生した。その後も大きな余震があり、全継続時間は約 3 時間にも及んだ。

・震源地 北緯 34° 45 東経 139° 40

相模湾内大島北東 7 km の海底

- ・規模 M7.9
- ・震度 国内で37カ所の観測所があったが、いずれも計測器の針が振り切れているため、正確に分かっていない。
東京より被害は少なかった横浜の方が、3倍もの震度だった。

唯一、第三海堡の全景が分かり、震災直後の証拠写真でもある写真がある。

現地調査結果とその写真から得られる情報を重ね合わせ、どのように崩壊していったのか、東京湾口航路工事事務所で継続で解析しているところだ。



震災直後の第三海堡の写真（防衛研究所所蔵）

(2) 崩壊に関する検討のまとめ

全体

- ・第三海堡の建設は、まず外輪部に割栗石をドーナツ状に投入し、その内部に砂を入れて構築したものであるため、砂層は中央部が厚く、外輪部で薄くなっている。
- ・建設当時の捨て石勾配は概ね30°程度の平均勾配であった。
- ・数カ所で地滑り性の崩壊の発生した形跡が見られるが、このとき、すべり面の大部分は捨て石内部で発生している。
- ・崩壊後、大量の土砂が流出しており、海堡に近い海底に砂州のように沈殿している。

頭部

- ・地震直後、消波ブロックの直線性は大きく崩れておらず、崩壊発生時の形跡は認められない。
- ・消波ブロック前面の断面形状は当初の勾配より緩やかになっている。これは数度の被災を復旧した結果であると思われる。
- ・消波ブロック平面に砂の吸い出しによる陥没が認められる。

南西部

- ・防波堤の前面で、すべり崩壊が発生している。この崩壊の形態は剛体的な運動、つまり、ひとかたまりで移動し

たものと考えられる。

北東部

- ・消波堤の前面で、すべり崩壊が生じている。
- ・また、主崩壊の後に二次的な小規模な崩壊も発生している。

尾部

- ・尾部では円形部の付け根付近まで土塊移動が発生している。
- ・崩壊の形跡は認められるものの、南西・北東側よりも不明瞭である。
- ・土砂が薄く、流動的に移動した。

以上のように崩壊した第三海堡は一挙に約5m沈下し、大正14年(1925)、兵籍より除籍となった。

撤去工事

第三海堡撤去のきっかけになったのは、昭和33年(1958)の台風17号が東京湾を襲った時、第二海堡を第三海堡と間違えて、米軍の弾薬を積んだ船舶とか貨物船が一夜にして3隻もの船舶が第二海堡の浅瀬に座礁した事件である。にわか撤去の方がいい言う声が高まり、当時の運輸省が調査費を予算化し、昭和34年(1959)から調査を開始した。その当時は、三つの海堡とも米軍に接收されていたが、昭和38年に返還になっている。昭和53年(1978)4月に「開発保全航路の指定」が制定されたが、これは、国直轄が自ら整備するための根拠法だった。そこから本格的に調査が始まった。その翌年の昭和54年(1979)から私も携わり、それからでも22年たっているが、その間には第三海堡周辺では痛ましい事故も起こっている。

最初の調査が始まってから42年たった平成12年(2000)12月、漁業関係者の理解を得ることができ、撤去工事の着工となった。

着工から7年間で撤去を完了しようと、現在施工中だが、当初、予想もし得ないことが多く、撤去工事は難航している。

東京湾内と言っても海象条件が非常に悪い。

通行船舶が多い(世界一とも言われる輻輳海域である)、工事区域にボート・ヨット・貨物船が突っ込んで来る。いままで経験したことのない工事である。

設計書のない構造物である。

爆発物がどこに潜んでいるか分からない。

構造物の強度はものによって全然違う。

当初、確認出来ている構造物の数よりも遙かに多い。

撤去物の処分の問題(残しておきたいが、多量で大き

い)。

しかし、建築物のコンクリート強度はしっかりしたものである。

桜の刻印がある煉瓦も大量に見ついている。これは東京小菅修治監で作られたものと分かった。

このようなことから、慎重に安全にそして航行船舶の情報を管理するセンターを作って、一つ一つ丁寧に引き上げている。

まとめ

最後に、「東京湾海堡とは一体何であったのか？」と考えてみたい。

(1) 東京湾海堡が目指したもの

その成果は、また現代が受け継ぐもの後世の伝えるべきものは、非常に大きいものではなかったのではないか。

その一つは、なんとと言っても防衛と言う理念、地域社会を外敵から守ると言うこと、それから防衛への努力・意欲、そして防衛の重要性ではないだろうか。

もう一つは海洋港湾技術の開発および発展に多大な功績を残したことである。具体的には、

- イ・波浪・潮流に関する知識
- ニ・コンクリート技術
- ロ・基礎技術
- ホ・ケーソン工法
- ハ・海洋港湾工事の施工

さらに、約 100 年にわたって、魚卵・稚魚を育む魚礁として、東京湾を豊かにして来たこともまた事実である。

西田家からみた明則
~ 西田明則の子孫として ~

東京湾海堡ファンクラブ副会長 西田好孝



【西田明則について】

岩国吉川藩の下級武士出身、普請方・測量方を仰せつかる。

主な経歴

*印は時代の出来ごと

文政 10 年 (1827 年) 11 月 3 日、生まれる。

安政 3 年 (1856 年) 家督相続。(29 才)

(*アメリカ総領事ハリスが下田に着任した。)

明治 4 年 (1871 年) 11 月 14 日、兵部省に出仕 (44 才)。

同郷の山縣有朋の要請と伝えられる。

(* 廃藩置県)

明治 5 年 (1872 年) 8 月 23 日、陸軍工兵大尉任命。

(* 陸・海軍省ができ、学制が行われた。)

明治 13 年 (1880 年) 1 月 30 日、山縣有朋参謀本部長により参謀局内に海岸防禦取調委員会が設けられ、委員に任命される。

明治 14 年 (1881 年) 8 月 1 日、第一海堡起工 (水深約 5m)。

明治 22 年 (1889 年) 7 月 12 日、第二海堡起工 (水深約 10m)。

明治 23 年 (1890 年) 12 月 20 日、第一海堡竣工 (工期 9 年間)。(* 第一回衆議院議員選挙、民法・商法公布。)

明治 25 年 (1892 年) 8 月 1 日、第三海堡起工 (水深約 40m)。

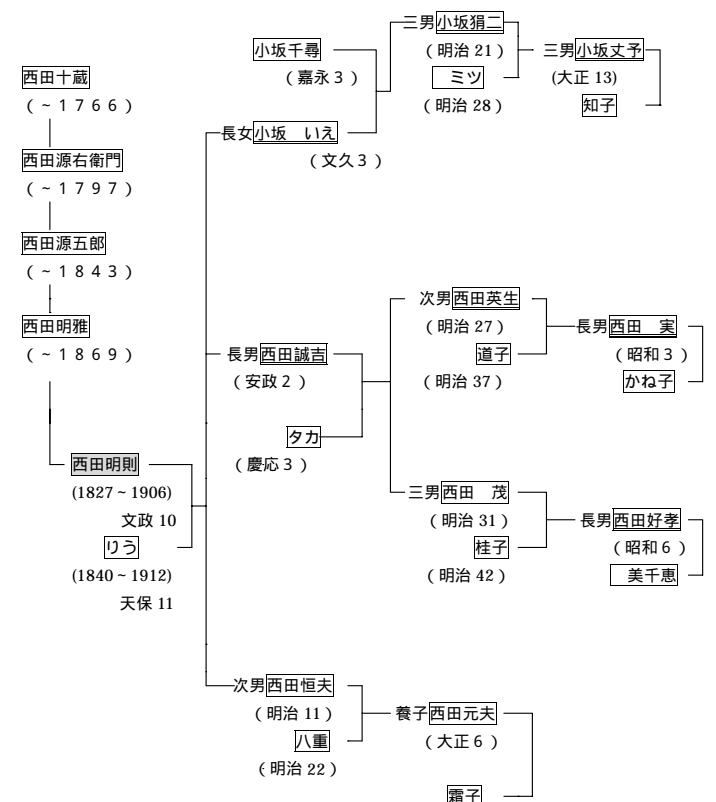
明治 39 年 (1906 年) 5 月 21 日、死去 (79 才)。海堡工事に通算 25 年間関与。

大正 3 年 (1914 年) 6 月 1 日、第二海堡竣工 (工期 25 年)。

大正 10 年 (1921 年) 3 月 1 日、第三海堡竣工 (工期 29 年)。

大正 12 年 (1923 年) 4 月「西田明則君之碑」除幕式、横須賀市衣笠公園。

西田家系図





西田明則陸軍工兵少佐
(小坂丈予氏所蔵)



晩年の西田明則
(西田実氏所蔵)

年月日	海堡ほかの出来事	西田明則
文政10年11月3日(1827)		出生
弘化3年(1846)	米・英・仏軍艦来航するようになり海防論盛んになる	
嘉永3年12月22日(1850)		
嘉永6年(1853)	ペリー浦賀に来航	
安政3年(1856)	米総領事下田に着任	家督相続し岩国藩普請方・測量方仰せつかる
明治元年(1868)	明治天皇江戸城に入られ東京と改めら	
2年6月(1869)		
3年10月(1870)		
4年11月14日(1871)	廃藩置県	兵部省に出仕 山縣有朋の要請と言われる
5年8月23日(1872)	陸軍省設立	陸軍大尉任官
5年11月(1872)		
7年1月19日(1874)		陸軍少佐昇任
7年8月(1874)		
7年10月15日(1874)		
8年1月(1875)		
10年12月22日(1877)		
明治11年6月30日(1878)		
11年8月23日(1878)		
12年1月11日(1879)		
12年10月20日(1879)		
13年1月30日(1880)		陸軍参謀局内に海岸防禦取調委員会設けられ委員に任命さる
14年6月13日(1881)		
14年8月1日(1881)	第一海堡起工	
15年12月18日(1882)		
16年9月20日(1883)		
22年7月12日(1889)	第二海堡起工	
23年12月20日(1890)	第一海堡竣工	
25年8月1日(1892)	第三海堡起工	
39年5月21日(1906)		死去(79才)
大正3年6月1日(1914)	第二海堡竣工(工期25年間)	
10年3月1日(1921)	第三海堡竣工(工期29年間)	
12年4月(1923)		「西田明則君之碑」除幕式(横須賀市衣笠公園)
12年9月9日(1923)	関東大地震	

海堡から生まれた文芸

～ 岩野泡鳴の『海堡技師』～

東京湾海堡ファンクラブ幹事 高橋悦子

1. はじめに

東京湾海堡建設の功労者・西田明則をモデルにした詩劇『海堡技師』を紹介する。瞑想詩劇『海堡技師』は、西田明則が死去する約半年前の1905年(明治38年)11月に発表された。詩劇は劇詩といい、上演を想定して創られたものではなく、劇の形式をとった詩である。劇の形式とは、対話で構成されているということで、台詞中に事件の進行が見える。岩野泡鳴は『海堡技師』の他に『焰(ホノ)の舌』『斧の福松』『人肉狂売』などの劇詩を書いている。

2. 岩野泡鳴

本名：岩野美衛(ヨシ) 1873年(明治6)1月20日～1920(大正9)5月9日(享年48歳)

岩野泡鳴は、明治・大正期の自然主義文学者で、詩人、小説家、評論家して大きな足跡を残した。

兵庫県生まれ。醜悪な人生相を荒々しい筆致で描いた自然主義文学の異色の作家といわれている。一人物の眼による作中の全世界を統合する「一元描写理論」を主張した。代表作は、詩集『闇の盃盤(ハルハソ)』、小説『耽溺(タダキ)』、評論『神秘的半獣主義』がある。

〔参考資料〕梅棹忠夫・金田一春彦ほか監修：『日本語大辞典』講談社、1989.11.6、伴悦：『岩野泡鳴論』双文社出版、1977.11.10

3. 瞑想詩劇『海堡技師』の内容

著者：岩野泡鳴〔表紙は泡鳴だが、奥付では本名の「岩野美衛」を使っている。〕

表紙と挿絵(3枚)：小林千古〔岩野泡鳴の友人〕

印刷：明治38年(1905年)11月20日

発行：明治38年(1905年)11月25日

印刷所：国光社、発売元：金尾文淵堂

頁数：本文186頁



図-1 『海堡技師』の表紙
(国立国会図書館蔵)
〔手に持っているのは急須。〕

【献辞】

「この著を、之が主人公と脱化せし老隠士の息女、故陸軍歩兵大佐小坂(枘)千尋氏の未亡人御許に献ず。」と献辞が記されている。

“老隠士”は西田明則であり、“小坂千尋氏の未亡人”とは明則の長女・小坂い糸のことである。



写真 - 1 西田明則君之碑 写真 - 2 西田明則君之碑竣工式での遺族
大正 12 年(1923)4 月 22 日〔右から二人目が小坂い糸〕

【出版の形式】

この作品は、雑誌に発表せず、そのまま単行本化されている。

【はしがき】

「こは、世の所謂悲劇にあらず、喜劇にあらず。さりとして、又在来の夢幻劇にもあらず。その主人公の冥想、一貫して、之に始り、之に終るの以て、ここに之を冥想劇と称したり。」

【登場人物】

技師長：星野玄道、お杉、名主：吉次、名主の妻：お高、名主の娘：お花

潜水夫：重助、男女土方多数、船頭数名、技師下役数名、士官・官吏多数

陸軍大臣、知事、代議士数名、県会議員数名

赤鯛王（日本代表）、鎚奴（希臘(ギリヤ)代表）、珊瑚姫（印度代表）、真珠星（南洋代表）、百合子（希伯来代表）

波の霊：金むく、波の霊：銀むく、波の霊：瑠璃児

【あらすじ】

- 序の幕 -

第一 名主宅焼香の場

玄道との結婚を翌日にひかえたお花が毒殺され、その葬儀の場から始まる。

第二 珊瑚樹下船出の場

お花を殺したのはお杉であることが分かり、玄道とお杉は海の上で話しをするため舟に乗る。

第三 富津海人柱の場

国を護る海堡建設のため、人柱になるように玄道はお杉

につげる。玄道は毒を入れた急須を投げ込み、お杉に石を結びつける。お杉は富津の海に沈む。



図 - 2 『海堡技師』序の幕の挿絵（国立国会図書館蔵）

〔お杉の手に毒を入れた急須がある。〕

- 中の幕 -

第一 第一海堡懐旧の場

土方たちの会話。玄道が自分を好きになった女性を人柱にするくらい海堡工事に熱心であることを讃えている。

第二 第二海堡潜水夫の場

第二海堡の建設現場。石を投げ込み、潜水夫の重助が石をならすために潜る支度をしている。玄道は「三つの海堡ができれば東京湾は安全な海になる。」と話す。

第三 第三海堡水底の場

珊瑚姫と赤鯛王、真珠星が第三海堡の現場海底で石に腰かけ話をしている。「人の智慧で島を生み出すつもりらしい。このような物が出来るのも、この日本の人々に絶えぬ歴史があればこそだ。」

そこに潜水夫が降りてくる。「あれこそ、この石をなおしに来た潜水夫だ。」
と、珊瑚姫たちは別の場所に去っていく。



図 - 3 『海堡技師』中の幕の挿絵

（国立国会図書館蔵）〔右上は降りてくる潜水夫〕

- 詰の幕 -

第一 玄道退隠祝いの場

陸軍大臣、参謀総長、ほか大勢の来賓が玄道と潜水夫の重助を取り巻き、玄道の退隠祝いをする。

来賓が帰った後、土方が来て「大津波が来て、海堡は皆砕けてしまいました。」とつげる。

第二 茫然たる海底の平原

海底でお杉とお花が玄道をめぐって言い争いをする。お杉は「第一海堡、第二海堡、第三海堡は私が産んだ子である。」という。このときの玄道は若者に戻っている。

第三 珊瑚樹下瞑想の場

舞台が序の二幕（珊瑚樹下）に戻る。玄道が夢から覚め

る。海堡が波で壊れてしまったことも海底での二人の争いも夢であった。玄道は海をみて、「あの海堡は伊豆の山を二つ砕いて生まれたものだ。30年来毎日行って育てた愛しい子だ。自分が死んだ後は三つの霊火(タビ)が夜ごとに燃えるだろう。」という。



図 - 4 『海堡技師』 詰の幕の挿絵 (国立国会図書館蔵)
〔若い姿の玄道、お花、お杉〕

4. 岩野泡鳴の伝えたかったことは何か

当時の時代背景としては、日本は日露戦争の時期(1904年～1905年)であったことがあげられ、日本は急速に軍事主義国家の道を進んでいく時だった。

岩野泡鳴は愛国主義者であり、日本主義者だったので、詩劇『海堡技師』を通して首都防衛の意義を伝えたかったのではないかと考えられる。

5. 作品から気づいたこと

『海堡技師』の作品の中で、特に気づいた点をあげると、潜水夫のことである。

海堡の建設従事者の中でも潜水夫だけが重助という名前がついている。他の土方や船頭には名前がついていない。また、玄道の隠居の祝宴でも、玄道と一緒に重助を取り囲んでいる。このことから、潜水夫の仕事が海堡建設の中で特殊な技術をもった人として、特別に扱われていたことがわかる。

6. 海堡と文芸(今後の活動に向けて)

『海堡技師』の内容は、国を護るために女性を人柱にするといった、今日の私たちからすると理解しにくいところはある。しかしながら、岩野泡鳴は愛国主義の時代を背景にこのような作品を発表したと考えれば、発表された当時は理解しがたい作品ではなかったのかもしれない。

戦争のない新しい時代になった今、泡鳴の『海堡技師』をひとつのヒントとしたい。すなわち、歌、演劇、俳句、小説、写真、絵画といった文芸・芸術作品を海堡から発信するという発想である。

海堡を題材にした文芸・芸術作品の発表によって、東京湾海堡ファンクラブの活動が広がりあるものになると思う。

会員からの投稿

第三海堡の記念博物館を建設しよう

～歴史を大事にする国に生まれ変わるために～

東京湾海堡ファンクラブ会員 吉川透

二年前、国土交通省が企画する「二十世紀 日本の河川」というビデオのシリーズ10本余の制作に、その一部「近畿編」や「外国人技術者編」の脚本・演出担当として携わったことがある。制作を進めるにあたっては、それ以前からお雇い外国人の研究調査を進めていた地域開発研究所の島崎所長や高橋悦子さんには、大変お世話になり、今でも深く感謝申し上げている。

明治の新政府が文明開化を進めるためにお雇い外国人という形で、欧米の各国から数多くの科学技術者を招いた中に、オランダ人の河川土木技術者デ・レイケという人がいた。途中で一度帰国しているものの、通算して三十年近くもの間日本に滞在し、淀川はもちろん木曾川や大阪港などの改修工事に大きな功績を残した人である。そのデ・レイケが明治8年、日本で初めての近代的な河川工事として「粗朶沈床工法」という工法を施工した。その記念すべき事跡を紹介しようと、ロケハンで初めて淀川上流を訪れた私たちスタッフは、大変落胆する破目になった。残された数少ない資料から推定した肝心のその個所には、貴重な歴史的事実を紹介する立て札一本もなかったからである。監督の私は同行のカメラマンに「このあたりをパンで撮って欲しい」という漠然とした曖昧極まる頼み方で頼むしかなかった。

実は落胆はそれだけでは終わらなかった。河川技術者たちの技師長格であったファン・ドールンが、日本で最初の量水標を設置したという利根川の境町あたりの該当する個所にも、説明板一枚もなかったのである。

考えてもみよう。お雇い外国人たちが残してくれた技術遺産がなければ、その後の河川改修技術の進歩発展は難しかったのではないかと。その場所がどのような歴史的価値を持っているのか、説明板一枚でもそこに建てられていたら、水遊びや釣りや散歩にやってきた人々に、お雇い外国人たちが残してくれた文化的功績を知り、自分たちが現在置かれている境遇の恩恵を、しみじみと偲ぶよすがに出来るのではないであろうか。家族連れで立ち寄った場合であつたら、親子の間で歴史が伝えられていく、格好の総合学習のチャンスになるのではないであろうか。私はこの時ほど我が祖国の未成熟さと野蛮さに恥ずかしい思いをしたことはない。デ・レイケや

ファン・ドールンにも心から済まないと思った。しかし、次々にこなさなければならない目の前の仕事にすっかり忙殺され、説明板の設置を提案してこなかった、自分自身の怠慢さを何よりも恥じなければならないが。

昨年から今年にかけ再び縁あって、国土交通省が企画する「第三海堡物語」というビデオの制作に携わることになった。この時には、当時、東京湾口航路工事事務所所長であり、現在は本会の幹事であられる朝倉光男氏に、厳しい注文を要請され、作品の密度を高める上で多大な恩恵をこうむったことを、今でも深く感謝申し上げている。

会員の方々にはすでにご存知のことであるが、明治時代、陸軍省が首都東京を外国の攻撃から守るために東京湾内に造った三個の海上要塞の一つ第三海堡を、海上交通の安全と整流化のために撤去することになった一部始終を描くものである。ことが軍事機密に属するため、残された資料も乏しく、設計図も吊り上げたコンクリート塊からコンピュータ解析により復元していくしかないものであるが、水深約5メートルの第一海堡や9メートル前後の第二海堡はともかく、40メートル近い水深の海中に造り上げた第三海堡は、当時の海洋土木技術の水準に照らしても、世界的に数少ないユニークな海上建造物であると位置づけられている。その建設の背景には、本会副会長、西田好孝氏の曾祖父にあたる西田明則という偉大な人物の、文字通り献身的な努力が傾注されていたのである。戦時に備える要塞ということから、とかくマイナーなイメージを抱かれがちであるが、当時の日本が置かれた国際情勢を考えれば、国土防衛にとって必須の事業であったと言える。幸いにして地域開発研究所の高橋悦子さんたちが調査を続けた結果、最近では当時の米国から技術の照会が要請された公式の文書も発見されたと聞いている。

今度こそ私は、多忙や怠惰に負けずに、声を大にして提案したい。このまま海面から姿を消してしまう第三海堡の記念博物館を創り、後世にその存在意義と建設技術とを出来る限り正確に伝えていくようにしようではないかと。本会こそその中心であるべきだと。

第一海堡や第二海堡についての資料や展示物も、当然そこに包含されていくものと思うが、何より強調されなければならないのは、「第三海堡が」今回の撤去工事によって、永遠に海面上から、いや人々の目前から「姿を消してしまう」という事実である。その文化的痕跡を留め得るのは、記念博物館の建設をにおいてあり得ない、と信じるものである。

第三海堡の痕跡を、魚類や海棲哺乳類の目にさらすだけの存在に終わらせるようなことになれば、私たち陸棲哺乳類の

一種 人類にとって、取り返しのつかない失態というべきであろう。

見学会のご案内

「富津湾の会」見学会

千葉から川崎を船で見学

日時：2003年3月13日(木)

工程：富津公民館(8:30)～千葉港(若潮丸乗船 9:30)～浦安沖～川崎側(風の塔)～東京湾アクアライン(海ほたる)～千葉シーバス～袖ヶ浦工場地帯(海上から)～千葉港ポートタワー(昼食 12:20 - 1:20)～佐倉国立歴史博物館(1:40 - 3:00)～富津公民館(4:30)

集合場所：富津公民館あるいは千葉港(千葉みなと駅下車徒歩10分)

申込み：富津湾の会の方は、富津市公民館 tel.0439-87-8381。
富津湾の会以外の方は、(株)地域開発研究所 高橋 tel.03-3831-2916 まで。

参加費：1,000円

締切：バスの定員は40名で締め切ります。

若潮丸乗船のみの参加は100名で締め切ります。

定員になりしだい締め切らせていただきます。

その他：昼食は各自ご負担ください。

海上視察はシケの場合は中止となります。その場合は他の施設を見学する予定です。

ファンクラブ見学会(第2回)

第三海堡・第二海堡見学

日時：2003年3月頃を予定。

集合場所：国土交通省東京湾口航路工事事務所

〔横須賀市平成町3-21-44 tel.0468-28-8366〕

海堡シンポジウム(第2回)

日時：2003年5月頃を予定。

皆さまからのお便りをお待ちしております。

「海堡」に投稿ください。葉書、手紙、E-mail、写真、ご意見、近況、作品、随筆など、事務局までお寄せ願います。

【会員数の報告】

2003年1月31日現在、当会の会員数は、76名です。



第一海堡（2000年2月 西田信吉撮影）

コラム

西田明則（にしだあきのり）

明則を“あきのり”と読むのか、“めいそく”と読むのか、真実はわかりません。それは、戸籍にフリガナをつけないためです。本人の手紙が残されていますが、当然のことながら、署名は漢字で書かれているだけです。明則と話したことがある人は現在では誰も生きていません。西田好孝氏・小坂丈予氏をはじめ、明則の子孫(曾孫)の方々が話し合っ、て、“あきのり”と読むことに統一することになりました。そのため、ここでも“あきのり”と表題をつけました。

しかしながら、“めいそく”と呼ばれていたことも事実であると思います。その根拠は、明則の孫にあたる小坂狷二(オカケンジ, p.13 写真-2 一番左)がアルバムに「Meisoku Nisita 祖父西田明則」と書いているからです。ただし、それが正式な呼び名であるかどうか、今となっては判断が付きません。小坂狷二は、明則の長女いゑと共に、明則と一緒に暮らしています。小坂狷二著：「小坂千尋小伝」1940.10.28には、狷二の父・小坂千尋(山県有朋の通訳だった方)と祖父・明則のことが詳しく書かれています。その中に“明治22年(1889)10月、小坂千尋が山県有朋に随行して欧米を巡行しての帰途、東京湾口を通過中、海面に僅かに露頭した海堡の基礎を望み見て、山県監軍は「やア、西田の痘癩玉(マ)がとうとう海の上へ頭を出しよったのう。」と言って大笑されたそうである。”と記述があります。明則が痘癩持ちだったかはわかりませんが、気性の激しい方だったのではないかと想像します。

一方で、「毎晩のように工事関係者を自宅へ呼び、酒や料理をふるまった。」(いゑから小坂丈予氏が聞いた話)といますから、部下に慕われた人だったと思います。

さらに、明則は岩国で柔道師範をしていた武道家だったようです。西田家には明則が取得した武術の免許皆伝状が残されています。

【高橋悦子】

〔次回は永島庄兵衛について紹介します。〕

入会案内

東京湾海堡ファンクラブの活動主旨にご賛同いただける個人・法人(グループを含む)の入会を募集しております。

入会希望者は下記入会申込書にご記入のうえ、事務局までご送付願います。会費は下記口座にご送金ください。

東京湾海堡ファンクラブ入会申込書

入会申込み日	年 月 日
フリガナ 氏名 (個人あるいは グループ名)	
勤務先 (法人会員の 方は連絡先)	会社名/ 部署名
	〒
	住所
	電話
	ファクシミリ
E-mail	
自宅	〒
	住所
	電話
	ファクシミリ
	E-mail
会報送付先	勤務先 自宅 (希望する方にをつけてください。)
E-mailによる会報の送付 (E-mailでの会報の可否についてをつけてください。)	E-mailでの会報の送付 (可 不可) (宛先: 勤務先 自宅)

連絡先が変更になったときは、ただちに事務局に連絡いたします。

銀行振込口座

「東京湾海堡ファンクラブ会計高橋悦子(トウキョウワンカイハウファンクラブカイケイタカハシエツコ)」
東京都民銀行 御徒町(オチマチ)支店 普通預金 4011598
会費(年間) 個人会員: 1,000円 法人会員: 10,000円

事務局

〒110-0015 東京都台東区東上野 2-7-6 東上野 T.I ビル
(株) 地域開発研究所内 東京湾海堡ファンクラブ事務局
事務局長: 島崎武雄 会計: 高橋悦子
電話 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048
HomePage: <http://www.wup.jp/~kaihoufc/>
E-mail: kaihoufc@wup.jp

「海堡」 kaihou No. 2

- 東京湾海堡ファンクラブニュース - 第2号

東京湾海堡ファンクラブ 2003年1月31日発行